

# ふくやま文学館友の会だより

第20号



2018年（平成30年）10月15日発行

〒720-0061

広島県福山市丸之内1-9-9

ふくやま文学館友の会事務局

TEL (084) 932-7010

FAX (084) 932-7020

## 第十八回文学探訪「京都洛東の文学探訪」に参加して

塚本みや子

第十八回文学探訪はまず京大見学。昼食は、学食。好きな料理を格安値段で学生たちもいる中で食す。シンボルの時計台記念館には、井上靖、菊池寛などの文学者や、湯川秀樹の資料などが展示されていた。京大百年の歴史を見学し、自由な学風がノーベル賞を多く受賞した理由と聞き納得。楠若葉の茂る広大なキャンパスを学生に戻った気分で散策した。

次に法然院を訪れた。法然は岡山県久米郡の出身。浄土宗の開祖で「念仏を唱えれば救われる」と専修念仏を説いた。浄土真宗を開いた親鸞は法然の弟子である。法然院墓地はひっそりとした木漏れ日の中にあり、谷崎潤一郎夫婦や妻の妹夫婦の墓があった。いずれも丸い小さな石の墓で、それぞれ「寂」と「空」の一文字だけが刻まれていた。墓石の後ろに、平安神宮の桜と同じ紅枝垂れ桜が植えられていた。マルクス経済学者の河上肇ら著名人の墓もあった。

### 走り根と跨ぎ墓まで木下閑

法然院を出て、北へ向かって「哲学の道」を歩いた。地元の人が「疎水べり」と呼び、明治末期京大哲学科の先生であった西田幾多郎が、思索にふけりながら散歩し、後に京大生がそれを真似て「哲学の道」と名づけたといわれている。大正年間には日本画家の橋本関雪夫人がこの道に桜の苗木を四百五十本寄贈し、今日では四季折々の景観を楽しめる。現在は多くの店が並び賑わっていた。

次の探訪地は「白沙村荘」といわれる橋本関雪記念館。彼は京都画壇で活躍した日本画家で、多くの文学者を支援し、自宅をサロンとした。井伏



は福山中学（現・誠之館高校）を卒業後、画家を志し、関雪の門を叩いたが拒絶された経緯がある。関雪は「白沙村荘」の作庭や建築を三十年間にわたり行い、国の名勝に指定されている。現在は、関雪のお孫さんが住み記念館を管理され、その当時の様子等話してくださった。

### 関雪と語らう庭や亀の鳴く

最後は与謝野晶子も絶賛した紅葉の永観堂として親しまれている禅林寺に参拝した。真言宗から浄土宗に改宗した永観は、民衆への布教に取り組み支持された。阿弥陀如来立像「みかえり阿弥陀」に会う為に阿弥陀堂まで長廊下を登る。有名な如来を見、崇高な身の引き締まる気分させられた。いつもながら充実した文学の旅でした。



ふくやま文学館友の会 第18回文学探訪「京都洛東の探訪」(2018.5.27)

### 第十七回福山及び近接市町村ゆかりの文学者 近藤芳美

杉之原寿美子

#### プロフィール

近藤芳美は、一九一三（大正二）年、父近藤得三（銀行員）、母昌香の長男として朝鮮馬山で生まれる。本籍は現・広島県世羅郡世羅町青水である。一九二五（大正一四）年、一二歳の時父母と離れ、朝鮮より広島市鉄砲町の祖母方に弟と寄宿。一九二六（大正一五）年、県立第二中学校（現・広島観音高校）に入学する。国語教師に迫空門下の稲毛宥元、英語教師に「アララギ」の中島周介らがついて、短歌の影響を受ける。一九三一（昭和六）年、広島高等学校（現、広島大学）に入学し、年末アララギに入会する。一九三二（昭和七）年、病氣療養中の中村憲吉を訪問し、初めて教えを受ける。二年後、中村憲吉が死去し、斎藤茂吉や土屋文明等と布野村の葬儀に参列する。その後、土屋文明に師事する。一九三五（昭和一〇）年、東京工業大学建築学科に入学、新聞部や文芸部などで活躍する。一九三七（昭和一二）年、朝鮮の金剛山で開かれたアララギ歌会に出席、土屋文明の弟子の中村年子と初めて出会う。一九三八（昭和一三）年、東京工業大学を卒業、清水組（現・清水建設）に入社する。一九四〇（昭和一五）年、中村年子と結婚する。二か月後に広島で入隊。揚子江上で作業中に負傷する。入院中に胸部疾患が発見され、広島へ戻り陸軍病院に収容される。その後、東京の清水組本社に設計技師として勤務する。一九四六（昭和二一）年、関東アララギ『新泉』を創刊する。一九四八（昭和二三）年、第一歌集『早春歌』、第二歌集『埃吹く街』を刊行する。一九五一（昭和二六）年『未来』を創刊する。

その後、中国新聞歌壇選者、朝日新聞歌壇選者となり、歌論書、歌集など、次々と執筆活動を展開し、生涯で刊行された歌集や著書は五〇余冊にのぼる。また、自伝小説『青春の碑』には世羅郡世羅町との関わりも書かれている。

第一歌集『早春歌』の歌は、若い近藤芳美の新鮮な抒情や深い思念が知的に詠われている。

国論の統制されて行くさまが水際立てりと言語り合ふのみ

たちまちに君の姿を霧とざし或る楽章をわれは思ひき

果てしなき彼方に向ひて手旗うつ万葉集をうち止まぬかも

「中村憲吉の死後、土屋文明に師事し、リアリズム短歌の影響を強く受け、さらに社会詠・思想詠に発展させていった。戦争体験への厳しい批判精神が根底にある。また夫婦二人だけの生活の静けさを望み、大手建設会社の技術エリートを辞し神奈川大学教授へと転出した。そして音楽・絵画・文学などの教養を楽しみながら歌を作り、外国旅行を重ねた」

と『未来』の次期発行を継いだ岡井隆は語る。

二〇〇二（平成一四）年、歳書の殆どを日本現代詩歌文学館に寄贈する。

二〇〇六（平成一八）年、九三歳で永眠する。工学博士。詩歌文学館賞、現代短歌大賞、斎藤茂吉文学賞等を受賞する。文化功労者顕彰。

その他の歌集には多くの人を魅了した歌が掲載されている。

森くらくからまる網を逃れのがれひとつまほろしの吾の黒豹

すでにして「神」としあらむ救済の老いの果てなる静けさが待つ

「岐路以後」

マタイ受難曲そのゆたけさに豊穡に深夜はありぬ純粋のとき

「岐路以後」

福山文学館にも「ふくやま近接ゆかりの文学者」として近藤芳美の資料を展示している。

#### 福山文化圏との関わり

一九七九（昭和五四）年、広島県世羅郡世羅中学校校歌を作詞する。世羅中学校初代校長は新しい校歌を作るべく近藤芳美を東京に訪ね依頼するが断られ、二度目の依頼でようやく承諾し、世羅町や中学校を案内され作詞したと言われている。世羅中学校校歌

一 山々は まどかにめぐり  
草も木も 緑に萌ゆる  
この国を ふるさととして  
友よみな 明日へと生きん  
語り合おう 思いはひとつ  
手をとれば 若さは光

二 せせらぎは さやかに流れ  
豊かなる 実りはにおう  
この丘を 学び舎として  
友よみな 未来に向かえ  
仰ぎ立つ 空の真澄に  
羽ばたけば 夢限りなき

一九九七（平成九）年、世羅町では近藤芳美の文学活動を讃え、名倉町民第一号として顕彰した。そして世羅文化センター前の公園に歌碑を建立した。

近藤芳美の歌碑

山まどかに清らに流れは石を洗う  
人は生きつげりここを古里と



平成9年、世羅文化センターの歌碑除幕式のため帰郷。近藤芳美（中央）左隣りが年子夫人。

# 会員の広場

## 誰故草

特別会員 松岡 幾男

誰故草、たれゆえそうと読む。アヤマ科の植物で、その可憐な姿や佇まいは、古来、多くの人を魅了してきた。主として広島、愛媛、山口、佐賀、宮崎に生息する。この花を扱った詩歌や文学作品はないものかと探しているが見つからない。

さて、この花は一八七七年にイギリス人により新種として発見され、アイリス・ロッシー・ベイカーと命名されたが、一八九九年、植物学者牧野富太郎が愛媛の山中で採取した標本を新種として「アイリス・イヨーナ マキノ」と命名し、植物学雑誌に発表した。その後、牧野博士は、すでに正式学名があり、国内には古くから「誰故草」という名が存在すると、標準和名を「誰故草」とし、別名をエヒメアヤメとした。にもかかわらず、国が、一九二五年に山口、佐賀、宮崎などにある自生地を天然記念物に指定する際、「エヒメアヤメ自生南限地帯」と表現したことから、その呼び方が一般的となっている。この花は、日本列島と大陸が地続きであったことを証明する貴重な存在で、乱獲や都市開発が進み生育する場所を失い壊滅状態で、環境省から「絶滅危惧種」に指定されている。

広島県下でも、保存活動が盛んで、その代表的なもの、広島市の「船越誰故草保存会」である。福山市内にも自生地があって、福山市は一九六六（昭和四一）年福山市天然記念物に指定し、さらに地元自治会や熱心な愛好家が草取り、観察、見廻りなどの活動を展開している。今では人工授粉の技術や、自生地から採取した種を発芽させ結実させる栽培方法は、すでに開発されている。そうなる、自生地にこだわらなくてもこの花は愛



好家の手で栽培すれば、広くいつまでも保存できるはずである。そこで、このたび「福山・誰故草愛好会」を結成し、夏までには啓蒙、研究誌を発売することにした。ついでに言えば、頭を悩ませるのは盗掘の防止である。いきおい自生地を公開せず、警告板を立て、柵で囲む。それでも防げない。新聞も最近、せら夢公園での盗掘事件を報道し、柵や防犯カメラ作動の警告板の設置の必要性を指摘している。「隠して守るか、見せて守るか」この花は、とてもデリケートで咲いている期間がせいぜい一〇日程度で、持ち帰っても移植が難しく、ほとんど枯れてしまう。この特性を講演会などで一般に広く啓蒙して、野において皆で楽しむと呼びかけるのが最良の自衛策である。

自生地が年々、荒廃していき、株数が減少しているうえ、株分けや移植が難しいとなると、この花を守るには種から育てた実生の株を豊饒な、新しい土地に植え、言わば「実生による群生地」を作るしかないと考えている。こうした試みは、久しく実践されているが、私もその手始めとして、今春、発芽した三株を友人から譲受け、わが庭に育てている。

## 「赤川次郎」の展示を望む

林 尚子

私は赤川次郎のファンなので「赤川次郎の世界」という展示を催して頂けると嬉しいです。私は推理小説が好きで、特に平凡なサラリーマンが登場する作品に興味があり、その中に描かれている女性にも興味があります。

赤川作品には「三毛猫ホームズ」シリーズや映画にもなった「セーラー服と機関銃」など多くの作品がありますが、私が最近読んだ小説で面白かったのは「うち足りた悪漢たち」です。



## 漢詩

展望尾関山公園 近藤 哲男

奪目楓林物外天  
雲流晴朗尾関巔  
回頭遠近画前景  
錦繡江山在眼前

## 阿久利への想

阿久利姫の  
見おろし 山河  
われもみる  
紅葉燃え立つ  
尾関山公園



## メッセージ

安達道子（一瀉千里）

我を忘れて  
何か 打ち込めるものを持つひとは  
たぶん  
極上の幸せ

旅であれ  
趣味であれ  
日常の ちよっとした生活であれ

走り続けて  
ときには 休憩をとってみるのも  
階段と階段の間の  
小さな踊り場で

そうすると  
今まで 見えてなかったものが  
さらさらと 降りてくる





鱒二詩碑彫りに溜るは冷酒かな  
谷崎の眠る古刹や青時雨

奥山清美

青もみじ奥ゆきみせる永観堂  
しなやかに風おだやかな京扇

小田淑子

糸替へてより琴の音の涼しかり  
銚廻す青竹の音軋ませて

北村京子

五月病知らぬ部活のチューバ吹く  
京大の自由を謳え青嵐

今野真

万緑の中金色の阿弥陀仏  
哲学の道葉桜の日の斑浴び

佐藤浩子

正論は時に不都合亀泣けり  
被爆図の前で止まるや羽抜鳥

塚本みや子

文豪の墓寂とのみ木下闇  
若楓明りに秘仏拝しけり

広川良子



若葉雨孫の折りたる飛行機の  
金銀黄色キッチンへ飛ぶ

羽田登江

吾の顔を食い入るやうに見し父に  
涙にじむを今も憶へり

日石輝子

うず高き社報の処分思いたち  
夫は後期高齢者に入り

失せ物をひと日さがして暮れにけり  
年の明けたる七十五の春

朗読



### 「友の会」の活動計画

友の会会長・岡崎 忠

- 一、「友の会だより(第二〇号)」発刊
- 二、「第六回ふるさと現地文学館Ⅱ」

「上下・世羅の探訪」  
今回は、田山花袋(小説家)・岡田美知代(小説家・翻訳家)・近藤芳美(歌人)のゆかりの地を訪ねます。併せて江戸幕府の天領、白壁の似合うロマンのまち「上下」と、三百年にわたる高野山を支え続けた大田莊(現・世羅町)の「今高野山龍華寺」の紅葉の散策、雪舟ゆかりの「康徳寺の庭園」にも立ち寄りませす。

日時 二〇一八年十一月四日(日)  
場所 ①上下歴史文化資料館「岡田美知代展示室」②上下の町並み散策(劇場「翁座」など)③近藤芳美の文学碑(世羅)④今高野山龍華寺(世羅)⑤康徳寺(世羅)など

### 三、第五回文学講演会

ふくやま文学館に親しんで頂くため、近隣在住の講師を招き講演を聞く研修会です。  
日時 二〇一八年十二月一日(土)午後(二時) 問)

演題 「怪談と地域の魅力」  
講師 光原百合(尾道市立大学芸術文化学部日本文学科教授・作家)  
場所 ふくやま文学館研修室

### 四、第五回文学講座

今年度は、世羅ゆかりの文学者について学びます。  
内容 近藤芳美(歌人)の「人と文学」に親しむ。講師 岩崎文人(ふくやま文学館館長)

朗読 朗読の会「虹」による近藤芳美(歌人)の自伝小説「青春の碑」と「短歌」の朗

日時 二〇一九年一月二六日(土)午後(二時) 問)

### 五、第十九回文学探訪

場所 ふくやま文学館研修室  
「松山の俳諧の三庵めぐり&夏目漱石の松山での足跡」を訪ねて  
全国各地の文学館を訪れ見聞を広めたり、会員相互の親睦を深める探訪会です。

日時 二〇一九年五月二六日(日) (予定)  
二〇一九年度の「総会(四月)」で決定  
内容 「総会」で詳細提示

六、「鱒二忌」(井伏鱒二没後二六年)  
井伏鱒二を偲び、歩んだ道や作品を通じて、その業績を顕彰する。  
日時 二〇一九年七月(鱒二の命日に近い日曜日)

場所 ふくやま文学館研修室  
内容 「井伏鱒二の業績を偲んで」記念講演及び朗読の会「虹」による「作品」の朗読  
主催 ふくやま文学館・ふくやま文学館友の会  
後援 井伏鱒二在所の会・井伏鱒二文学研究会

## 編集を終えて

編集委員・岡崎・岡田・杉之原・深川・村上  
今夏は、風水害、地震など全国的に災害が多発し、福山でも多大なる被害が発生しました。亡くなられた方のご冥福を衷心よりお祈りするとともに、被害を受けられた方に心よりお見舞いを申し上げます。

「文学館友の会だより」は、会員同士の交流を目的として二〇〇一年より毎年一回発行して参りましたが、今年第二〇号を迎えることができました。これは偏に皆様のご協力の賜物と深く感謝いたしております。ありがとうございます。今後とも紙面の充実に努力いたして参ります。ご投稿よろしくお願い申し上げます。